
幽幻恋譚

夢幻遊戯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽幻恋譚

【Nコード】

N5316T

【作者名】

夢幻遊戯

【あらすじ】

それは突然の出会いだった。雨の中、家の前に倒れていたのは一人の少女。

可愛いし、胸も大きい。だけど、そんな彼女は人間じゃなかった。

彼女は……そう、キョンシーだった！！

キョンシーの少女と出会ってから生活は一変！

おバカでドジな美少女道士！ 思い込みの激しいヤンデレ気味の剣道少女！

本当にキョンシー？な美少女！ 美少女妖怪多数！

そして、迫り来る魔の手。果たして、この先どんな物語が待ち受けているのか。

「関係ないな。来るヤツは全員……ぶつた斬るだけだ！」

……これは、そんな『修羅』の血を引く一人の少年の物語。

第一話：キョンシー少女登場（前書き）

どうも、はじめましての人ははじめまして。そうでない人はおはこんばんは。

夢幻遊戯です。

今回、第三作目のオリジナル小説となる『幽幻恋譚』です。

……以前書いていた、『DEMONS DOLL』は理由により削除致しました。今作は、その代わり、と言う意味合いでもありません。

尚、現在執筆中の『ストライクウィッチーズ 夢幻協奏曲』の文法とは若干違った書き方をしております。従って読みづらい、とか何とか出てくるかと思いますが……その辺はどうかご了承下さい。

それでは、どうぞ。

第一話：キヨンシー少女登場

季節は十月になったばかり。去年を上回る猛暑続きがようやく終わったかと思えば、今度は逆にとても冷え込む。秋の季節になったとは言え、その寒さは秋を通り越し冬の物だった。息を吐けば白くなって視認出来るぐらい、外は冷え込んでいる。

外を歩く連中は、皆厚着していた。大きなコートを羽織っている女性、革ジャンを纏い友人と喋りながら歩道を歩く若い男……。そうして皆寒さから身体の温度が冷えぬように、と対策しているのの中には真夏かと思わせるぐらい肌を露出させた女性の姿がちらほらと視界に入る。

今流行の御洒落、なのだろう。女性が御洒落をし、身を飾ることに対して別の文句を付けるつもりはない。ただ、そこまでして御洒落をしたいものなのか……と言う疑問だけはいつも生じる。真冬並みの寒さの中、真夏のような格好をしてまで今年の流行に合わせる。果たして、この行為にどれだけの価値があると言うのだろうか。

自分ならば絶対にしないけどな、と少年は道行く女性を見ながら呟く。

—— ああ、またか。

少年は何かを感じ取り、そして小さく溜息を吐くと進行方向を変える。

人気の多い表通りを外れて街の路地裏へと入る。昼間とは言え、路地裏の暗さと静寂さは不気味さを生じ、そして訪れる者の心にそれを植え付ける。少年は気にせず、そのまま路地裏の中を進んでいく。

「よお、御神……」

不意に、若い男の声が背後から聞こえた。

声だけが虚しく流れる。少年は歩みを止めず、そのまま歩き続ける。後数mで、再び表通りへと出る。

「おい聞いてんのかよッ!？」

少年が無反応だった事が気に食わないと、若い男は声を挙げ肩を掴むと無理矢理少年を此方へと振り向かせる。少年の視界一杯に広がる、振り返らせた若い男の顔は包帯やガーゼで保護されていた。ほぼ全体に包帯が巻かれた顔、僅かに露出させている肌は紫色に変色している。

少年を振り返らせた若い男の後ろには、同年代ぐらいの男達が五人いた。

「……またお前か、和也」

心底面倒臭そうに、少年は男に言葉を投げ掛けた。

かつて、同じ高校に通っていた同級生。俗に言う不良と呼ばれるやつだ。

「お前俺達をこんなにしといて、其の後よく暢気に外歩いてられるなあ……おい」

ニヤニヤと、他の男達は少年——隼人に歪んだ笑みを向ける。嘲笑うかの様に、見下すように。二人の男がポケットに入れていた手を静かに抜く。其の手には、鈍く光る金属の塊があった。

メリケンサック……拳による打撃力を高めてくれる、言わば暗器の一種だ。今では通販や店でも安くで購入できるし、ポケットに入れて携帯出来るから簡単に持ち運べる。それを指に嵌めて、男達は

見せ付けるようにしていた。

ふっ、と鼻で笑う。いや、笑ってしまった……と言った方が正しいだろう。

こいつ等は正真正銘のバカだ。あれだけ痛め付けられた、と言うのにまだ分かっていない。武器を持ってきた事は学習した、と褒められる。が、所持してきた得物がそれじゃ意味がない。

だから俺は笑ってしまった。それに、そろそろ面倒だという気分にもなってきた。

「デメエ……何笑ってんだよ」

振り向かせた男が乱暴に胸倉を掴もうと手を伸ばす。それを合図に、隼人は動いた。

伸びてきた男の腕を掴み、そのまま素早く間接を極める。そのまま身動きを封じる、なんて甘っちょろい事はしない、それに相手は一人ではなく多数だ。そんな事をしていたら逆にやられる。だから——極めている間接に力を込める。そして一気にその腕をへし折った。

「ひ——ぎゃあああああつ！！！」

痛みの悲鳴を男は上げる。胸倉を掴もうと伸ばした腕は逆の方向に折れ曲がっていた。

折れた痛みに男は力なくその場に両膝を付く。そこに隼人は髪の毛を鷲掴みし、乱暴に男の顔を上へと向かせると、その顎に右膝を叩き込んだ。人間の身体でもっとも硬い部分は踵、肘、膝……。拳による打撃よりも、その威力は遥かに大きい時には致命傷すらも与える。

蹴り上げる様に放った右膝蹴り。膝に硬い感触が伝わると伴い。

がちつ、と何かを噛み合わせる様な音がなった。男はそのままゆっくりと後ろに倒れる。口元からは血の筋を流している。その光景に、あれだけ不敵な笑みを浮かべていた男達は驚愕の色を浮かべその場に佇んでいた。

ああ、だからこいつ等はバカなんだ。隼人は呆れながら近くに居た男との間合いを詰める。

男の顎に固く握り締めた拳を当てて、そのまま髪の毛を掴んで一気に地面へと……顔面から渾身の力を込めて叩き付ける。ぐしゃ、と嫌な音を立ててアスファルトに叩きつけられた男の顔。髪の毛は掴んだまま、そのまま男の顔を上げる。

嗅覚を司る部位、鼻変な方向に折れ曲がり、両穴からは赤い液体を流していた。男はピクリとも動かない。息はしている、死んではない。戦闘意欲を先程の一撃で喪失してしまっただけのこと。

つまらない、と隼人はもう一度地面に男の顔を叩き付けてから、ゆっくりと立ち上がる。

四人の男達はまだ動かない、ただただ目の前の光景に啞然としているだけ。

……よくよく見ると、最初に地面に伏させた男——和也以外は知らない顔ぶれだ。

まあコイツの仲間なんだろう。そして大方、ストレス発散に人を殴らせてやるとか何とか言って誘い、そして誘われた側も遊び感覚で参加したんだろう。

実に愚かなことをコイツ等はした。遊び半分で人を殴れると思い、和也の誘いに乗ってしまった故に、逆に再起不能になるまでやられるハメとなってしまった。誘いに乗らなければこんな事にはならなかったのに……。

「どうしたんだよ、もう……終わりか？」

硬直している男達に隼人は声を掛けた。男達からの返答はない。一步、足を踏み出す。途端、我へと返ったのか。人をバケモノを見るかの様な眼を向けると、悲鳴を挙げながら路地裏から出て行った。

逃げていく四人の男。その背中を見送りながら倒れている男に視線を向ける。腕が圧し折れ、白目を向いて斃れている和也。殺してはいない、そもそも……こんな奴に殺すだけの価値なんてない。

そろそろ学習する、と言うことを憶えておいて欲しいもんだ。俺とお前達では、住んでいる世界が違う。殺してやる、とその場のノリや弾みでしか口に出出来ない人間と、常にその『死』とこいつ等が口にする『殺してやる』と言う事と向き合ってきた人間とでは、話にならない。

隼人は倒れている和也にしたうちを零し、静かにその場から立ち去った。

先程まで青かった空は、いつの間にか雲に覆われ灰色の空と化していた。程なくして、ぽつりぽつりと雨が降り出し——大雨が地上へと降り注がれた。

「クソッ……雨かよ」

鬱陶しそうに空を見上げながら隼人は言う。

今日の天気予報で雨が降るとは一言も言われていない。だから突然の雨に皆駆け足で建物の中に入ったりし、雨から逃れている。中には、常に携帯しているのか折り畳み傘を差している奴も居た。

そんな中、俺はいつも通りにしていた。いつも道を歩く歩幅で、スピードで歩く。別段、焦る必要はない。既にこの身体は雨によつ濡れている。今更慌てて走り雨宿りしても意味がない。だからこのまま、いつも通りに帰路を歩いて家へと帰る。

帰路を歩き、自宅に向かうこと早十分。無駄に広い、自分以外に

住んでいる者がいない我が家が見えてきた。そしてどういうワケか、今日はいつもと違っていた。

玄関の前に何かが置かれてある。激しい雨に遠目からではよく分からないが、それなりの大きさを持つ何かが、家の前に置かれていた。新手の悪戯か何かか、ソレにゆっくりと近付く。

「……………は？」

我ながら間抜けな声を出していた。

だってそうだ、玄関の前に人が倒れていたら誰だって間の抜けた声を出して我が目を疑うだろう。玄関の前に置かれてあったのは、ボロボロの小汚い布に包まれた大きな何か。その布からは人の腕が生えている。よく観察してみると、ぼろ布に捲かれていたのは一人の少女だった。外観年齢から見ても、多分俺と同じぐらい。美しく、凜とした顔立ち。簡単に言えば美少女、という奴だ。

……こんなドラマや漫画みたいなこと、実際にあることにまず驚き。そして次に、何故俺の家の前に、と言う疑問に頭を悩まされた。こういう場合はとりあえず、救急車を呼ぶことが先決になるのだろう。どんな形にせよ、人が倒れているということは何らかの異常を起こしたから。ならば直ぐに救急車に連絡しなければならぬ。隼人は少女を背中に負う。子供をあやす様に揺するが、少女からの反応はない。

長時間、この雨に濡れ続けていたのか。少女の身体から熱がほぼ奪われ、冷え切ってしまったている。

救急車に電話するにせよしないにせよ、こんな大雨の中放置しておく訳にはいかない。身体を冷やしては、生存率も低くなる。少女を背負い、門を潜ろうとして――、

「うわっ！」

少女の細い腕が首に巻かれる。首だけを振り返らせるが、少女が起きた様子はない。落ちない様にと、無意識による行動か。けれども、ちゃんと生きていることだけ確認出来たのはよかった。まだ、息はある。

……背中に伝わる感触が気になる。少女が首に腕を回したことで更に密着する形になってしまった。そのお陰で俺の背中には今、女性を象徴する部位が押し付けられている。只でさえ恥ずかしいのに、こんな事をされるのは色んな意味でヤバイ。

そもそも、どうして俺はこの少女を背負っているのだろうか？ 背負わず、俗に言うお姫様抱っこでも良かった気がする。それが思い付かず、無意識に背負うという行動を選択してしまったのは、俺の失敗だった。

でも、悪い気はしない。不謹慎ながら、自分が男として生まれてよかったと思った。

隼人は頭を悩ませていた。と言うのも、原因は目の前に少女にある。

一先ず家の中に入れて、少女を自分の布団へと横にならせた。雨で濡れてしまった衣服は、何とか脱がし乾燥機の中に放り込んでいる。下着は、幾ら何でも脱がすことは出来なかったから、ストーブと暖房を入れて自然乾燥させることにした。……もし、ここで目を覚ましたら確実に俺は痴漢、犯罪者扱いされてしまうだろう。

……それにしても、この少女は何者なのだろう。まず分かっていることは、彼女は日本人ではないということ。今乾燥機に放り込んだ服は日本の物じゃない。中国……それも拳法家が着る様なデザインの赤いドレス。服装から考えるとすると、彼女は中国人だろう。そして不可解なのは、彼女の身体。現在進行形でストーブと暖房をフル稼働させている。部屋は暖かくなった、にも関わらず。彼女の

体温は一向に上がる気配を見せない。

背負った時に感じた、あの冷たさのまま。そして彼女の肌……。本来肌色の筈の身体は青白い。腕も、足も、顔も……。全身。極めつけは脈拍が一切取れないときた。手首に指を当てるも彼女から脈打つ感触が感じ取れない。

最後に、彼女の額には一枚の御札が貼り付けられていた。あの大雨の中に居たと言うのに、ふやけてもいないし破けてもいない。新札同様の感触が手に伝わる。

……ここから考察するに、彼女は多分、“人間”じゃないんだと思う。自分でも何を思っているのか、と思わずツツコミを入れたくなる。けれども、現状からしてこの少女が普通の人間だとはとても思えなかった。

青白い肌、脈が取れない、一向に上がらない体温、中国系統の衣装、そして御札……。これからから考察するに、恐らくこの少女は……キョンシーってやつだろう。映画でしか見たことがないけど、多分……いや、確実に。

どうして俺の家の前にキョンシーが、と言うのが一番の疑問だ。キョンシーと言ったら中国の妖怪だ。どうしてその中国の妖怪がここ、日本に……。俺の家に倒れていたのか。

どちらにせよ、これでは救急車を呼べない。呼んで家に死体があったら、確実に俺は警察行きとなる。それだけは何としても避けたい。この歳で捕まり将来を潰されるのだけはゴメンだ……。

「……とりあえず、晩飯の材料買ってくるか」

何が起こきようと腹は減る。一先ず夕食の材料を買いに出掛けよう。

……このまま、この少女を寝かせておいても大丈夫だろう。だけど、置手紙ぐらいはしておいた方がいいのかもしれない。キョンシ

ーと言えば中国の妖怪、ならば文字も……中国語じゃないとダメなのか。

パソコンを起動させ、インターネットから翻訳サイトにアクセス。シンプルに『買い物に行っています』と打ち込み、中国語に変換させる。それを身ながら近くにあった無地の白い紙に書き写す。

「よし、そんじゃ早速――」

不意に、柱に掛けていた木製の札が割れた。空手家が板割りをする時、正拳突きや蹴りで割る際に発するあの音を立てながら。縦に、綺麗な断面図を残して真つ二つに割れた。

割れた板を見て、隼人は直ぐにクローゼットを開く。

クローゼットの中には衣服類は一切入っておらず。ここまで持つ必要があるのか、と相手が尋ねるぐらいの刀がずらりと並べられていた。内、一振りに手を伸ばし掴み取るとそれを腰に差し部屋を静かに出る。

……今は亡き祖父。その祖父にガキの頃に言われていた、あの話。この家の門には魔除けが施されており、人間じゃない者が入るとそれに連動して魔警板と言う板が割れる。つまり、一種の防犯機能と言う訳だと祖父は俺に話してくれていた。

ガキの頃、人間じゃない者について俺は全く信じていなかった。

お化けや怪物、あれらは全て想像だけで創造された産物。この世には実在しない、と。

けれど、祖父の言っていたその魔警板が割れている。つまり、コレが何を意味するのか。この家にその人非ざる者がこの家に入ってきた、ということだ。何かの偶然なのかもしれない。だが、念には念を。もし、本当だった場合……御神家の頭首としてこの家を守る為に務めを果たすしかない。

表へと出る。外は未だに雨が降り続いているが、先程よりもその

勢いは柔らかくなっていた。その雨の中、視界の先に佇んでいる五つの影。外とこの家の敷地との境界線である門。その門を越えて直ぐに、それはいた。

両腕を真つ直ぐと伸ばし佇んでいるソレ。衣装は、また日本の物じゃない。それこそ、映画に登場するあの衣装と全く同じ者を奴等は纏っていた。そして、各々の額には黄色い札が一枚ずつ貼られている。もう、相手が誰なのか考える必要はない。

相手は人間じゃない、キョンシーだ。

等間隔に横一列に並んだ、五体のキョンシー。内、中央に立つキョンシーが動いた。あの独特の動き、真つ直ぐ両腕を伸ばし足首の力だけで飛び跳ねてくる様は、まさしくキョンシーそのもの。

隼人が動く。手にしていた一振りの刀、それを鞘から払い近付いてくるキョンシーに向けて振るう。

一閃、袈裟に振り下ろされた一撃はキョンシーの身体を捉える。がん、と重く鈍い音が雨の音に混じり鳴った。

袈裟に振り下ろした一撃は、確かに。キョンシーの身体を捉えた。中空を奔る白銀の刃は、左肩から右脇腹に掛けて切り抜ける筈だった。だが、振り下ろした刃は左肩で止まっていた。

キョンシーがピンと伸ばした両腕を腰の動きだけで振るい、攻撃を仕掛けてくる。

鋭く伸びた爪が襲い掛かり、それを素早く引いた刀で弾き返すと、鋭い横薙ぎを相手に叩き込む。またも、キョンシーにその刃は通らない。鈍い音を立てて刃は硬化している身体に受け止められてしまう。

舌打ちをし、五歩程下がりが間合いを空けて隼人はキョンシーを見据える。

「硬いな……」

隼人はやれやれ、と言いたげな表情を浮かべて言った。

キョンシーの身体は硬直している為間接が殆ど曲がらない。故に、あんな両腕を真っ直ぐ伸ばしバランスを取りながらゴム鞠の様に跳ねてしか移動する事が出来ない。死後硬直しているキョンシーの身体。その身体に刃は通らない。

記憶が正しければ。キョンシーに最も有効な武器が幾つかある。

桃剣……桃の木で作られた木剣。桃の木には悪鬼を祓う力を持っている為、と言うような話を何処かで聞いた覚えがある。

銭剣……清めた銭を赤い紐で結び繋いで作られた剣。剣として使用するだけでなく、縄の様に分解して相手を拘束することも可能とする。

……残念ながら、二つとも俺の家にはない。銭剣に対しては、あれは長い修行を積み法術を会得した道士のみが扱える代物だ。道士じゃない、法術を学んでもいない俺が使うことはまず不可能。そもそも、清める為の“銭”すら家にはない。

他に、もち米を用いると言った対処法があった。もち米はキョンシーから受けた毒を緩和させる効果もあると言う。日本で言えば節分の日の様に、鬼には炒った豆……の様な関係なのだろう。そのもち米も言うまでもなく、家にはない。

他にも何か方法があった筈だが………忘れた。いずれにせよ、その方法を思い出した所で意味はない。今この状態だけで何とかするしかない。

キョンシーが向かってくる。相変わらず、向かってくるのは最初の一体のみ。他の四体は同じ位置に留まり両腕を伸ばしている。大方、道士でもない人間程度一人で充分………とても思っているのだろう。思考能力があるかまでは分からないが。

確かに、俺は道士じゃない。だが、普通の一般人でもない。代々家より最強を自負し、現代へと受け継がれてきた技術が、力が俺にはある。

どんな相手が来ようと、何に対しても負けるな。それが御神家

の基本であり最終の教え。その教えに従い、一刀の元相手を切り伏せてみせる……！

——面白い。実に面白いじゃねえか。

架空上の存在と一戦交えられる、こんな御伽話の様な出来事が訪れるとは思ってもいなかった。また、悪い癖が出始める。御神家の血をこの五体に宿しているが故の、悪い癖。今が楽しくて楽しくて仕方がない。どうやってあいつ等を斬ってやろうか、斃ころしてやろうか……そんな考えばかりが浮かんでくる。

今やっていることは喧嘩、なんて甘いものじゃない。命を奪うか奪われるか、死ぬか生きるかの二択を迫られた喧嘩……言ってしまったえば殺し合いだ。それも怪物との、だ。

その殺し合いが出来ると思うと、血が騒ぎ……今までにないぐらいの高揚が襲ってくる。弱い奴相手の喧嘩は飽きていた。そんな所に、丁度いい相手おもちゃが現れてくれた……。

不敵な笑みを浮かべて、隼人は静かに柄を握り直し正眼の構えを取る。

「でやあああああつ……！」

剣士は地を駆る。一振りの太刀を手に、相手へと向かって一直線に。

何の小細工も用いない。ただ純粹に直進し間合いを詰めて一撃を叩き込む。ただ、それだけの行為。このまま行けば、結果は以前として変わらない。また硬質と化しているキョンシーの身体に刃を止められ、そして今度こそ其の毒爪……或いは毒牙を受けるかもしれない。

だが、結果は大きく変わった。正確には予想もしていなかった……一人の乱入者の手によって。

目の前にいたキョンシーが凄まじい勢いで後ろへと跳ぶ。否、吹き飛ばされたと言った方が正確だろう。そして目の前には一人の少女の後姿があった。

一本に編まれた薄紫色の長い髪を靡かせ、黄色を主体とした中国衣装に身を包み、手には……何処から持ってきたのだろう。其の小柄な体格には似つかない、身の丈を軽く越える一振りの長柄剣が携えられていた。

日本で言う薙刀によく似た形状の得物……確か、名前は偃月刀と呼ばれる、あの三国志でも有名な蜀の武将、『美髯公』の異名を持つ関羽雲長も愛用していたとされる武器だ。

「私の主に手を出すな、貴様達の相手は……この私です」

どん、と力強く柄頭を地面に叩きつけて。訛りのない、滑らかな日本語で少女は言い放つ。すると、今まで門の前に立っていた四体のキョンシーが一斉に動き出した。

向かってくるキョンシー達に、隼人は刀を構える。と、少女は首だけを振り返らせると優しい笑みを浮かべて口を開く。

「大丈夫です。主は、そこで見ていてください。あれらの始末は、私がします」

その言葉を最後に、少女は手にした偃月刀を構え地を駆る。

驚くことに、その身体能力は普通ではなかった。一体この世界の何処に、たった一度地面を蹴っただけで数メートルも離れていた手との間合いを零にする人間がいるのだろう。だが、あの少女はそれを目の前でやってみせた。あまりにも常人離れた脚力、そしてもう一つ驚かされる出来事が起きる。

「破ッ!!」

気合の込められた声と共に一撃が繰り出され、キョンシーの身体は縦に切り裂かれる。そして程なくして、その身体は青白い炎に包まれて跡形もなく消滅した。俺が幾ら切り込んでも斬れなかった身体を、いとも簡単に切り裂いた偃月刀。勿論、あの偃月刀の威力に驚かされる。だが、本当に驚くべき所はそんな事ではない。

真に驚くべき所、それは彼女の腕力にある。偃月刀の重量は最大にして約二十五キロ。彼女の持つ偃月刀の長さは凡そ三メートル弱。そしてキョンシーの身体を切り裂く程の切れ味を持つ巨大な刃。これから考察するに、あの少女が持つ偃月刀は基本データ数値より超えている筈だ。

それを軽々と、まるで重さを感じていないかの如く振るい迫り来る敵を斃していく、これに驚かずにいられる訳がない。

……これだけの超人的な身体能力を発揮できるのは。やはり彼女がキョンシーだからだろうか。そんな事を考える。

同時、いつの間にか最後の一体となっていたキョンシーを切り裂く。偃月刀の鋭い刃が逆胴に走り、キョンシーの身体を切断。そして青白い炎に飲まれ、この世から消滅した……。

「他愛もない」

偃月刀を軽く振るい、少女が踵を返す。此方へと向かってやってくる少女。そして、得物を地面に置き目の前で跪いた。

突然の行動に、隼人は少し戸惑う。そんな事を他所に、跪き頭を下げた少女は静かに口を開いた。

「私の名前は桜花、と申します」

「あつ、お、俺は隼人。御神 隼人……です」

名乗られた事に、反射的に名乗り返す。

隼人……、と少女——桜花は呟き、そして立ち上がる。真っ直ぐと、濁りがない輝く瞳を向けて、口元を緩める。

「……隼人様。貴方は私の恩人です。そして、怪物を前にしても臆すことなく勇敢に立ち向かわれる姿、とても立派でした。よって、私はここに誓います。

この身が朽ち果て、生涯を終えるまで。貴方の剣となり盾となり、我が恩人である御神 隼人を主として尽くす……と」

人生はドラマ、何が起きるか本当に分からない。世界と言うのは時に、我々人間の常識を覆し非常識を起こすこともある。そんな、テレビか何かで聞いた台詞を……ふと思い出した。

第二話：今日のキミは昨日のキミ？（前書き）

第二話です。

第二話：今日のキミは昨日のキミ？

翌朝、日付は十月 四日と変わる。今日も今日で寒い日だ。家から外を一步出れば冷たい風が吹き、露出させている肌に突き刺すような寒さを与えてくる。

今日は平日、火曜日。高校に限らず、学校と言う職場に通っている者達は皆学校へと登校し、そこで午後まで授業を受けて勉学に励む。そして現在、今その授業中。科目は社会、俺が最も嫌い苦手としている教科だ。

不思議なものだ。自分が得意とする、好きな科目ならば意欲的に取り組めるというのに。逆に不得意とする、嫌いな科目だった場合全く勉強しようと言う気にならないし、なれない。こう言った場合は、ただ適当に授業を聞いているフリをして、終わることをただただ祈るばかりだ。

「……………」

不意に、桜花の事を思い出す。

家に一人残してきた、もとい留守番させている少女……キョンシー桜花。ユンファ

ほぼ無理矢理家で留守番させてきたが……ちゃんと留守番しているだろうか。そんな心配が出てくる。

ユンファ桜花、それが彼女の名前だった。だが、それ以外の事は何も分らない。

と言うのも、キョンシーの来襲を退け俺を主として従うと宣言した、その次の瞬間には性格ががりと変わっていたのだ。武人気質で、凜とした姿から一変。純粹無垢で、例えるのなら小動物の様な愛らしさを持ったユンファへと変わってしまった。青白かった肌も

人間としての肌色を取り戻し、体温や脈拍も感じるようになった。

あれだけ滑らかに喋っていた日本語も、今のユンファでは片言な物となり下手とまで口になっているぐらいだ。そして、額に貼られていたあの御札も気付かぬ内に何処かへと消えていた。

訳が分からない、と困惑している俺を他所に桜花は可愛らしい笑顔を浮かべて名前を名乗り、そして俺は誰かと尋ねてきた。一先ず、ユンファの笑顔が可愛かったから良しとする事にした……。

それから昨晚、色んな事を尋ねた。けれど名前以外何も情報を得ることはなかった。本人曰く、何も憶えていないそうだ。何時に生まれて何処に住んでいたのかも、どうして俺の家の前に倒れていたのかも、昨晚の一件も。桜花と言う名前以外、何も分からない、とユンファは口にした。

ただ一つ、本人の前では言っていないが分かった事がある。言うて記憶のないユンファを不安にさせない為に言わないでおいた。

彼女は（ユンファ）は後天的にキョンシーとなった可能性がある。その証拠に、たまたま見えてしまったユンファの左首筋には五ミリ程度の小さな穴が二つ、痛々しく残されていた。

キョンシーは血に飢えた人食い妖怪。そしてキョンシーに噛まれる、爪で引つかかれた者は自身もキョンシーとなる、という設定がある。ただ、キョンシーに傷を負わされた者もキョンシーとなる、と言う設定は吸血鬼やゾンビをイメージして出来上がった、即ち創作上の物だった筈。しかし、この傷を見る限り創作上の物として言い切れない。

もし、この傷によって本当にキョンシーと化してしまったのなら俺自身もあの時傷を負わされていれば、今こうして学校には来られていなかっただろう。

学校が終わった後は直ぐにもち米を大量に買っておく必要がある。昨晚の様に、またキョンシーが襲ってくる可能性はある。

——キョンシーが、また襲ってくる？

自分で思っで、新たな疑問が浮かび上がった。

そもそも、どうして俺の家にキョンシーが来襲したのか。俺の家には特に目ぼしい物はこれと言って何も無い。強いて言えば売れば高い値が付きそうな物から安物の百万程度の物まで、多くの日本刀があるぐらいだろう。

キョンシーがわざわざ日本刀を盗む為だけに来襲するとは、まず考えられない。

昨晚の出来事を、よく思い返してみる。

……そうだ。俺の家に来たキョンシーは全部で五体。内一体と俺は闘っていた。残り四体のキョンシーは高みの見物状態だった。そして、偃月刀を手にユンファが現れた途端アイツ等は一斉に襲い掛かってきた。

じゃあ、何だ？ あのキョンシー達はユンファを狙っている……？

不意に、教室中が騒がしくなる。喧騒によって思考を中断され、生徒達が一斉に窓際へと向かうのを見る。授業中だと、当然先生は生徒達に怒る。

何故、皆窓の方へと来ているのか。幸い、窓際の席に座っている俺はそのまま窓の外へと顔を向ける。視線を下にずらし、我が目を疑った。

校門を潜り直ぐの所、一人の少女が歩いていた。黄色を主体とした中国衣装を身に纏い、薄紫色の一つに編まれた長い髪を揺らし、おどおどとした様子で構内を歩いている少女が誰か。家で留守番を任せた筈のユンファだった。

このクラスだけではなく、隣のクラスからも。上からや下からも同じ様な喧騒が聞こえてくる。

ふと、ユンファが顔を上げる。そして目と目が合うと可愛らしい

笑みを浮かべながら大きく手を振ってきた。

「ハヤト」

「ご丁寧に、俺の名前を呼びながら……」。

一斉に、皆の視線が此方に向けられる。男子生徒からは嫉妬と憎悪の眼差し、女子生徒からは失望の眼差しを向けられる。中には涙を流しながら、私じゃダメなのか……と言い出してくる輩も続出。

「先生……ちょっと、席を外してもいいですか？」

先生は何も言わない。ただ黙って静かに、教室と廊下とを繋ぐドアを静かに指差した。それを見て静かに頭を下げて、教師を出る。出て、過去一度としてないぐらい全速力で廊下を駆け出した。

廊下を駆け抜け、階段を慌しく駆け下り、そして昇降口を飛び出す。

「ユンファ！」

どうして学校に来たんだと、留守番はどうしたと、言うつもりでいた。だが、ユンファは泣いていた。泣きながら、俺を見るとそのまま抱きついて来た。涙は一向に止まる様子を見せず、回した両腕を更に強く力を込めて身体を抱きしめてくる。

「ハヤト……ごめんなさい」

泣きながら謝るユンファ。

不安……だったのだろう。俺が思っていたよりも、遥かに。

一人家にいるぐらいで、と本来ならば思っているところだ。だが、涙を流し抱きしめている腕が震えているぐらい、ユンファは不安を

抱いていた。

過去に何か、余程大きなトラウマがあったからこそ、俺が思うぐらいユンファは不安で堪らなかったんだろう。そんなユンファを見て、責められる訳がなかった。

「……とりあえず、どうしようかなあ」

ユンファに抱きつかれたまま、隼人は首だけを振り返らせる。

背中に突き刺さる、痛い視線。振り向けば一階から三階、全教室の窓から此方を覗いている男女。それはやはり憎悪や嫉妬であったり、失望や悲観を感じさせる眼差しを、皆は此方へと向けていた。

「隼人君」

一人の中年の男が現れる。

肥満体型の身体に眼鏡を掛けている男。

某バスケ漫画に出てくるあの先生とそっくりな体格。仇名もあの先生の名が付けられるぐらいのそっくり度。元からコスプレしているとしか思えないぐらいの完成度の高い自然体。実際は、バスケ部の顧問をしているわけではない。

かつて冗談でバスケがしたいと相談したら、じゃあ入部すれば……と。何とも面白みもない、ノリの悪い返答を貰った記憶がある。

安住 慶吾……この学校の校長をしている人物でもあり、そして今は亡き親父の数少ない友人の一人でもある、とは祖父により聞かされた話だ。

「校長先生……」

「朝から、それも生徒達の前でイチヤイチャするなんて……昔を思い出すねえ。私も若い頃はそれはもう、プレイボーイ——」

「いや先生。その話はもういいです」

何度も何度も聞かされてきた昔話を聞くつもりは毛頭ない。だが、ユンファだけは興味津々と言った表情を浮かべて耳を傾けていた。

「なるほどなるほど、そういうことですか」

校長室にて。教育指導と言う名の下に連れられて、そこでお茶と茶菓子を堪能しながら事情を説明する。この先生の前で嘘は通じない。どんな嘘を吐いたとしても必ず見破られ、そして言わざるを得ない威圧感を以ってしてくる。

だけど、何に対しても真剣に話を聞いてくれる。どんな内容でも真剣に受け止めて、そしてそれに対し親密にアドバイスをくれたりしてくれる。正に、教師の鑑と言っても過言ではないぐらいの人物。それがこの人、安住 慶吾と言う男だ。

だから何一つ隠さず、昨日の出来事を説明した。その隣では、初めて食べる、と口にしていた芋羊羹を幸せそうな顔を浮かべて堪能しているユンファ。

「どう思います?」

「んゝ…君が言うのなら、本当なんでしょう。けど、まさかキョンシーが…中国の妖怪が日本に来てるなんてねえ」

たつぷりと付いた顎の贅肉を撫でながら、興味心身にユンファを眺める校長。一方、ユンファは余程芋羊羹を気に入ったのか、物欲しげな眼差しを俺に向けてきた。

……自分の分の芋羊羹を差し出す。ユンファは満面の笑みを浮かべて、二個目の芋羊羹にフォークを伸ばす。芋羊羹を与えたぐらいで喜んでくれるのなら、幾らでもくれてやる。少なくとも、泣き顔を見せられるよりかはいい。

「本当に……つすよ。しかも、何で俺の家の前に倒れていたのかも分からないし」

「……それで。君はこれから先、この子をどうするつもりですか？」

「……迷子とかならまず警察に連絡、でしょうけど。今はこんなでもユンファはキョンシーですからね。俺的には危険だと思っています」

ユンファはキョンシー。そして理由は分からないが、別のキョンシー達からも狙われている身。そんな状態の中で。警察に預けた所で対処が出来るとは到底思えない。そうなった場合警察側にも危険が及ぶ。

キョンシーに対抗できるのは、方術を極めた道士のみ。そして昨晚、キョンシー達を一刀の元に叩き斬ったあの凛々しい方のユンファしかない。

「だから、君の家で預かる……と？」

「まあ、そういう事になりますね……」

「……ハヤト。ユンファ、どうなる？」

芋羊羹を食べ終えていた桜花が不意に声を掛けてくる。その表情は不安の色を浮かべている。

「それを今話し合ってる最中だよ」

「……ユンファ、ハヤトの家出て行く？」

「いやいや、そんな話誰もしてないから。少なくとも、追い出す方針で話を進めていない」

「……えっと、ユンファちゃんだったかな？」

先生がユンファに話し掛ける。

「君はどうしたいんだい？ 人間誰しも選択する自由がある。君自身どうしたいか、意見を聞かせてくれませんか？」

「……ユンファ、ハヤトと一緒にいる。ハヤト、いい？」

「ああ、俺はな。とりあえず」

元より、断るつもりはない。それに、ユンファ程の可愛い女の子に上目遣いなんかされれば、俺でなくても世界中の男は快く承諾するだろう。

……不謹慎ではあるが、ユンファがいることでまたあのキョンシー達が襲ってくる可能性はある。昨日は、ユンファの乱入もあつて不戦勝という形で終わってしまった。だが、次キョンシーが現れた時は、邪魔はさせない。次は、俺自身の手でキョンシー共を斬る。今まで俺が学んできた事が、鍛えてきた業が、どこまで通じるのかも試したい。

「では、決まりですね」

「そういう事。心配するなよユンファ。関わった以上は、中途半端な形で付き合いを終わらせるつもりはない」

そう言つと、不安の色は消え明るく喜びの笑みへと変わった。やつぱり、可愛い子は笑っている顔が一番可愛い。

「謝謝、ハヤト！」

「で、何故こうなるんだ……？」

顔を引き攣らせて、隼人は言う。

一層騒がしくなる教室。そして痛いほど突き刺さる皆からの視線。廊下に視線を移せば、授業中であるというにも関わらず。隣のクラス男子生徒達が覗きに來ている始末。それを叱らない教師も教師だ。

全ては、あの校長の策略が原因。俺の家でユンファを住まわせると決めた後、今後どうするか。俺が学校へと行っている間は、ユンファに家の事を任せるように決めていた。だが、そうするとまた今回の様にユンファが学校まで来てしまうのではないか、と校長は言う。そして、一人で居る時にキョンシーに襲われる可能性もあるかも……。

事実、ユンファも一人で家で待つよりも俺と一緒に居たい、と言ってくる。

そこで校長が動いた。何やら、悪巧みを考えていそくな。邪悪な笑みを浮かべて……。

その結果が、コレだ。ユンファを俺と同じクラスに編入させる、というもの。

そうと決まれば、話は早かった。緊急会議を開き、そこで校長の
人望と洗脳させる程の話術を以って教師全員を納得させてしまった。
たったの数分で決まってしまう程、ユンファの処遇は早かった。

そして、明日から本格的にユンファの学校生活が始まる。俺はそ
のユンファのお目付け役、従って席も先生達の計らいで隣の席。元
座っていた奴は、ほぼ無理矢理違う席へと移動させられいった。

悪い事をした、とは少なからず思っている。しかし、決まってい
まったものは仕方がない。

校長の話では、“俺の親父とユンファの父親は心友の関係で、国
境を超えて飲みに行く程の仲だった。ある時、ユンファの親父が亡
くなり身寄りがないユンファは俺の家を頼って来た”……と言う設
定になっている。

よくあれだけの短い時間でここまで完璧な嘘を作り上げられたも
んだ、とつくづく感心する。

「隼人、ユンファちゃんの前で頭の悪い所を見せるんじゃないぞ」

「へいへい……」

「それにしても、羨ましいな。僕の奥さんもそりゃ美人だけど、ユ
ンファちゃんみたいな可愛い彼女を作るなんてな」

教師が茶化してくる。生憎と、ユンファとはそんな関係じゃない。
そもそも、今のユンファを彼女、として捉えるのは難しい。どちら
かと言えば、手の掛かる甘えん坊の妹の様なポジションだ。

「何でお前はそんなにモテるんだよー!!」

一人の男子生徒が涙を流しながら叫ぶ。それが火種となり、他の
男子生徒にも引火。やれ羨ましいだの、やれ放課後殺してやるだの、

言い出してくる。此方としてはかなりいい迷惑だ。勿論、ユンファにも。

「知るかよ！つーか俺はモテてねえつーの」

「死ねこの鈍感男がああああっ！！！」

「お前が死ね！」

「ハヤト、皆叫んでる。何で？」

「……放っておいたらいい。すぐに終わるから」

涙を流しながら襲い掛かってきた男子生徒の顎に鋭いフックを叩き込み、隼人は教科書を静かに開いた。

倒れた男子生徒はそのまま放置された状態で授業は再開される。前々から思っていたが、ウチの学校は何処か可笑しい。今に始まったことじゃないが、何処かが他校に比べて可笑しい。それもこれも、全部あの校長の存在があるからだろう。

そんな調子で、ユンファを交えての授業が始まる。

「隼人君！！！」

………新手がやってきた。憎悪の眼差しを向けてくる輩よりも、襲い掛かってくる輩よりも。もっと性質の悪い輩。

「おい、お前隣のクラスだろうがッ！」

「大した事じゃありませんッ！！！」

叫び、手にした一振りの太刀を鞘より払う。
鞘より払われた太刀は振り翳され、そして鋭い唐竹を繰り出してくる。

金属音が教室に鳴り響く。紫色の長い布袋、その中に入れてある物で乱入者の剣を受け止めた。

今朝より念の為の持ってきておいた“アレ”、まさかこんな形で早速使うなんて思っていなかった。

アレを大きく振るい、乱入者を後退させる。

乱入者は刀を構えて、ただ此方を見据えた。目頭に涙を浮かべながら……。

「私と言う彼女がありながら……浮気なんて不潔です!!」

「いや、お前は俺の彼女じゃねーだろ」

乱入者——楓に心底疲れ切った顔を浮かべる隼人。

松本 楓。剣道部所属、二年生にして主将を務める程の実力者。大会では無敗を誇り、現代最強の剣士、なんて言う異名もあるくらい。別に家が剣術家でも、武術家でもない。聞けば平凡かつ幸せな家庭だ。だが、楓には才能があった。

この現代で剣を振るう者としての、生まれ持ったの天賦の才。

その切っ掛けを作ったのが俺——らしい。記憶に全くないが、本人はそう断言している。そして本人曰く、初恋の相手でもあり現在恋人である。

初恋相手として選ばれたのは嬉しい。胸が残念な事を除けば、ユンファに劣らずの美少女だ。ただ、恋人関係にまで発展していない。そう公言しているのは全部『自称』だ。

「その貴女！ 隼人君は私の彼氏なの、その事をよく憶えておくことね！」

太刀の切先をユンファに向けて言い放った後、そのまま自分のクラスへと戻っていった。

誰も、今の光景を見て何も言わない。それは生徒に限らず、教師も。今の様なやり取りは、今日が初めてじゃない。

事ある度に模造刀を振り回し襲い掛かってくる、これはこの学校にとって日常茶飯事と化してしまっている。

「ハ、ハヤト……」

「あゝ気にすんな。アイツのただの妄言だ、妄言」

楓の登場と敵意を向けられた事に戸惑うユンファを宥めて。大きな溜息を吐いた。

「ハア……何か今日はどつと疲れたな」

夕日の光で赤く染まった街。いつも使っている帰路を二人肩を並べて帰る。

……今日は本当に疲れる一日だった。授業では先生の余計な計らいで当て続けられる、休憩時間になれば男子生徒達からの質問攻め、軽い殴り合いにも発展した。

そして楓は何度も何度も挑んでくる。何処に行っても、授業が終われば全員からの質問攻めと殴り合いに付き合い、本当に今日は余計な体力を使った一日だった。

明日も……いや、毎日こんな日が続いてしまうのだろうか。そう思うと自然と大きな溜息が漏れた。

ただ、ユンファは楽しんでいたみたいだ。多くの女子生徒共仲良

くなつたみたいだし、何より楽しんでいたみたいだ。今でも、明日から着て通う制服の入った袋を大切に抱きしめているぐらいだ。

…… 本人が楽しんでいたのなら、それはそれでいいだろう。

「ハヤト。今日、何する？」

「ん？ ああ、そうだな。何にしようか」

今晚の夕食を考えながら隼人はユニファと共に商店街の方へと向かって歩く。

今日の夕食の材料を買うのは勿論、ユニファの服を買うことも目的としてある。

今の所、ユニファは今身に纏っているチャイナ服以外服を持っていない。衛生的に考えて流石に毎日この衣装で過ごさせる訳にもいかないし、何より外の気候はもう冬だ。本人は寒い、と言った様子を見せないが万が一風邪でも引けば大変だ。

…… 女性物の下着や服なんて買ったことはない。こればかりは本人に選んでもらうしかない。

女性物の服売り場は女性スタッフで構成されている。男の俺が同伴して行くのは…… 流石にまずい。これをどうするべきか、店に着く前に考える必要があった。

「ところでユニファ、お前って別に中華とかじゃなくても大丈夫か？」

今日の夕食を何にするか、ユニファと相談しながらのんびりと歩いた。

「クソがつー！」

静寂が支配する、寂れた路地裏。

湧き立つ苛立ちと怒りに顔を歪ませ、力任せに蹴った空き缶が宙を舞う。暫くして、地面に落下し三回小さく跳ねる乾いた音が虚しく響き、そして静かに消えていく。

少年——和也は恨めしそうにギプスで保護された己の腕を見つめていた。見つめるだけで、昨日の出来事が鮮明に思い出される。和也にとって、喧嘩とは日常茶飯事だった。気に入らないヤツが居れば殴り、脅して金を巻き上げる。そんな事ばかりをしていた。その行為を咎める者も、注意する者もない。両親は早くして亡くなり、預けられた施設でも穏やかとはとても言えない、荒んだ環境下での生活を強いられていた。

毎日を暴力と共に過ごしてきた、そんな幼少期をずっと送ってきた。

いつしか、暴力で全てが解決すると理解した時。少年はただひたすらに暴虐の道へと突き進んだ。殴って、蹴って、相手を数週間入院させたこともあった。口封じの為に相手を辱め、それを脅しのネタに使い口封じをし、好きな時に金を巻き上げたりもしてきた。

社会からみれば、やっている行為は残虐非道。だが、それでも少年は気にしない。

ある時、気に入らない奴を見つけた彼はいつもの様に殴る事にした。

自分よりもルックスがよく、また大勢の女子にモテているソイツ。彼の目に映る彼は調子の乗っている奴として映った。その時点で、視界に映る少年を標的として決めるのには、充分な理由だった。

和也にしてみれば、己がしている行為はまるで狩りと同じ。それが格好良く感じ、また自分は強い存在——百獣の王だ、とも思えた。

だが、百獣の王と言えど所詮は獣。相手は、弱小な草食獣でも人間でもない。

狩りを挑んだ相手は……『鬼』だったのだから。

獣が『鬼』に、人外に敵うはずもなく。結果として、少年は逆に狩られてしまった。

初めて出会った、自分よりも強い存在。いや、強いなんて生半可なものじゃない。アレは、あの鬼は正しく常人を逸脱した強さを持っていた。そして、その力を己の身を以って理解した和也はただただ己が情けなく、そして悔しさを覚えた。

どんな相手も、気に入らなければブチのめしてきた。鼻の骨を折った、歯を折ってやった、原型が分からなくなるまで相手の顔を殴ったこともあった。

俺は……どんなヤツよりも強い。そんな思いを、あっさりと打ち碎いていった少年。

だから彼は忘れない、少年——御神 隼人に受けた屈辱を。その屈辱を晴らすが為に、今も尚、少年は彼に狩りを挑み続ける。正々堂々も、潔さも無い。ただ、勝てばいい……それだけを考えて。

「絶対にぶつ殺してやるぜ……隼人お」

蹴り飛ばした空き缶を上から強く踏みつける。

べこつ、と空き缶が凹む音を聞いて、その後更に蹴飛ばした。

「醜い奴ね……」

不意に聞こえた女性の声に、少年は振り返る。

なんだ、この女は……、と彼は身構える。この平成の時代、日本という国では絶対に目立つ変わった資格好をしていることもそう。だが、それよりも女から放たれる普通ではない雰囲気、彼は警戒

した。

……何処と無く、似ていたからだ。自分が憎み報復をすべき相手も、こんな雰囲気を出していたから。警戒している中、女性は静かに動く。

「……？」

少年は可笑しな事態に気付く。

いつの間にか、女は右手に剣を手にしていた。何処から出したのか、と思ったのが最初。次に疑問に抱いた事は、何故銀色の光を放つ刀身に赤い液体が付着しているのか。

その疑問に対する答えは、直ぐに返ってきた。

足元で何か音がする。蛇口を捻り流れ出す水がアスファルトの地面に勢いよくぶつかる、そんな音がいつの間にかしていた。足元に視線を下ろす。右足の直ぐ横で赤い液体が地面に流れ落ちていた。その時に見えてしまった、見てしまった。己の右腕がなくなり、そこから赤い液体を流していることに。

「ええ——！！！？？」

間の抜けた声を出す。

先程まであった筈の右腕が何処にもない。

一体何をされた？ まさか……あの女が手にしている剣で斬ったとでも言うのか、刀身に付いている赤い液体は俺の血なのか、と彼は改めて女の異常さを理解し、そして恐怖を感じた。

女までの距離は凡そ六メートル前後。手にしている剣の刀身の長さは一メートルぐらい。

どう考えても可笑的い、女は全く動いておらずその場に佇んでいるだけ。剣で斬ったとしても、その距離からでは絶対に此方に届くわけがない。

じゃあ、どうやって――

「死になさい、目障りよ」

鬱陶しそうな女の声が聞こえる。

伴い、鋭く風を斬る音が鳴って――少年の世界は一瞬にして黒く染められた。

――つまらない、と女は小さく溜息を零し、骸と化した少年を見下ろす。

つい先程、己の手で屠った人間。首を切り落とし、生きていた頃よりも醜態な表情を浮かべているソレを、力いっぱい蹴り飛ばす。少年が、怒りを露にしながら空き缶を蹴飛ばした時のように。女も、それと同じ様に蹴り飛ばす。

ただ、一つの違いは。蹴り飛ばされた少年の頭部は壁に力強く叩きつけられ、ぐしゃり――と肉の潰れる、実に不快感を与える音を立てて潰れた。

肉片が彼方此方に飛び散り、壁にも真つ赤な血と共に肉片がへばり付いている。

「はぁ……本当に、つまらない」

血振りをし、剣に付着した血を落とすと女は静かに、その場から立ち去った。

第二話：今日のキミは昨日のキミ？（後書き）

第二話でした。

……ふと思ったんですけど、オリジナルの方がリラックスして書けるって言うんですかね。

二次作を絡めた小説だと、やはりその二次作の設定とか凄く気にしながら書くので、結構疲れる……と思うのは、多分私だけですわねw 変な事書いて申し訳ないっす。次回もまた、読んで頂ければ嬉しいでっす。

すわっ!!

第三話：新！ 学校生活と敵襲（前書き）

第三話です。どうぞ。

第三話：新！ 学校生活と敵襲

翌朝、いつもの様に学校へと向かう。

いや、今日からいつもの様に——ではなくなった。

いつも自分の分でいい弁当も、今日からは二人分作る必要がある。いつも一人で通っている通学路も、今日から二人一緒に歩くことになる。

昨晩から学校に行くことを楽しみにしていたユンファ。その様子は、遠足に行く前の子供の様。学校に行くことがそこまで楽しい、とは思えないが。ユンファにしてみればそれぐらい楽しみだったんだろう。

キョンシーが学校に通う……何とも不思議な光景だ。尤も、今のユンファはキョンシーであってキョンシーでないようなものだけだ。ども。

「ねえハヤト！ ユンファ、似合う？」

等身大の鏡の前で何度も身形を確認しているユンファ。

学校の制服を身に纏ったユンファ。赤のチェック柄のスカートをひらり、と靡かせて。可愛らしくポーズを取る姿。何度見ても可愛らしいと思った。

「ああ、似合ってるぞ。凄く——って、こんな事してる場合じゃねえ！ 遅刻する！ おいユンファ、いつまでも鏡の前に立っていないでお前も準備しろッ！！」

時計を見て、焦りながら直ぐに自分の支度を始める。

時計の針は、午前八時十分を差していた。このままのんびりしていたら確実に遅刻する。

隼人は急ぎ支度を整えると、ユンファの手を取り家を飛び出した。

「えー今日から、と言うかもう皆知っているからいいな。ユンファちゃんが新しい仲間になる。皆仲良くするようにな、それから隼人はちゃんと彼女が楽しい学生ライフが送れるよう務めるんだぞ」

ほぼ男子生徒が教師の言葉に大きな声で返事をする。隼人はやる気のない声で返事をした。

何とか遅刻をせず、無事にホームルームに間に合えた。そしてそれが終わると、一斉に男子生徒達がユンファに質問攻めをする。それを咎めるのは……俺の役割じゃない。

質問攻めに困惑しているユンファを助けたのは、女子生徒達。煙たがる様に男子生徒を追い払い、そして優しく声を掛ける。ユンファも一瞬戸惑ったが、直ぐに優しい笑みを浮かべて彼女達にコミュニケーションを図る。

基本、ウチの学校は皆根が優しいヤツばかりだ。生徒だけでなく、勿論教師も。その反面、変わった奴等が多いが。

それでも、ユンファが楽しく学校生活を送るにはいい環境だ。とりあえず、下手な心配をする必要はないだろう。

そして、第一時間目の授業が始まる。

昼休み、隼人は屋上へと足を運んでいた。

屋上へと続くドアを開けば、誰一居ない寂しい空間が広がっている。

それもそうだろう。今の季節はもう冬の様な物、外に一步出れば冷たく寒い風が吹いている。ストープによって暖められた教室から、不必要時にわざわざ外に出て冷たい風に当たるのも馬鹿馬鹿しいと

言うもの。

だから誰一人屋上にはいない。それが好都合であつたりもするが、教室じゃ落ち着いて飯は食えない。楓や他の男子生徒達からグチと言われながら飯なんぞ食いたくない。

屋上へと足を踏み入れ、設けられているベンチに腰を下ろして持参してきた弁当を広げる。

ユンファは今頃、新しく出来た女友達と仲良く談話しながら食事をしているだろう。初めは俺にくっ付いてくるか、と思ったが……余計な心配で終わってくれた。昼食を誘う女子生徒達に快くユンファも承諾した。

流石に何時でもくっ付かれている状態じゃ、俺が落ち着かないし心身的に疲れる。せめて学校にいる時ぐらいは、学校の友人達と過ごしていて欲しい。俺にだって、自分だけの時間が欲しい。

冷たい風が吹く。その寒さに少し身体を震わせながら、自炊の弁当を口の中へと運んでいく。

不意に、物音が聞こえる。閉じた箸のドアが開いた音だ。

どうやら、俺以外にもこの寒い風が吹く屋上に来訪したヤツが来たらしい。口の中に入っている冷めた白米を咀嚼しながら、顔を上げる。

意外そうな表情を浮かべて、此方を見つめている一人の女子生徒。同じクラスの一員である、桐島 悠がそこに立っていた。右手には可愛らしいウサギの柄の小さな布袋が携えられている。

恐らく、彼女もここで弁当を食べに来たのだろう、と隼人は思い、そして視線を桐島 悠から外し自身の弁当へと向ける。そして、止めていた手を、箸を動かし再び食べ始めた。

桐島 悠——この学校の中で、多分。一番不思議な女子生徒なのかもしれない。

彼女の事はよく知らないし、知る者はいない。理由として、彼女

の周りには友達が誰一人としていないのだ。

考えられる原因は、恐らく二つ。

一つ目に挙げられるのは、彼女自身にある。他人を寄せ付けない威圧感、一匹狼を醸し出す雰囲気。他の女子生徒も気軽に話し掛けられないと感じ、なかなか喋りかけられない……一つ目の理由。

二つ目は、彼女の容姿にある。別に、彼女の容姿は決して悪くない。

問題なのはその外観。左腕は骨折したのか包帯とギプスによって保護され、右目は病か負傷によるものか——眼帯がされていた。今では外されているものの、日に日に増えていく包帯の数。

普通に学校生活を送っている者が、こうも大怪我をしている。加えて、日に日にそれが増えていく。よって、偏見的理由により彼女を気味悪がり近寄ろうとしない。

男子生徒達の噂によれば、交際している相手が薬をしていて性行為時に暴力を振るう。更に女が苦しむ姿を見るのが好みだと言う、超が付くほどのサディストだと言う噂も……。そして桐島はその男に脅迫されているが為に別られる事も出来ず、結果奴隷の様な扱いを受けている——等という、そんな噂が流れている。

……それが真実かどうかは、俺には分からない。

実際に見たわけではないし、所詮は噂だ。だが、一度生まれた噂は一人歩きし、やがては偽りの真実として成り立つ。現に、男子生徒達の間では既にその噂が事実として認識されてしまっている。

事実であれ偽りであれ、桐島にしてみればいい迷惑だろう。しかし、桐島本人もそれに対し全く関心を示していないが……。

俺には……とてもじゃないが、そんな人間とは思えない。

根拠という根拠はないと言えないし、あると言えばある。

左目と、先日まで眼帯によって覆われていた右目。

外の世界を捉える桐島の両目には、一点の穢れも濁りもない。とても、澄んだ目をしている。それが……桐島がそんなヤツじゃない

という理由。

大抵の人間、眼を見れば分かる。桐島の目は鋭く、他人を寄せ付けない感じがするが、決して堕ちている目をしていないと断言出来る。

弁当を食べ終える。ふと、直ぐ横に人の気配を感じた。

桐島が隣に腰を下ろし、布袋から中身を――――弁当箱を取り出そうとしていた。

「なあ桐島、お前その怪我……大丈夫か？」

桐島に声を掛ける。

すると声を掛けた事が意外だったのか、桐島は何処か戸惑った表情を浮かべて此方に視線を向けた。

……丁度、いい機会なのかもしれない。以前から、何故そんなに怪我をしているのかは気になっていたこともある。同じクラスになり、何ヶ月も経ってから聞くのも、どうかと思ったが。それでも、俺は桐島に話し掛けた。

「いや、別に言いたくないならそれはそれでいい。ただ、何となく前から気になってたし、それに包帯も増えてる気がしたからさ。んで、声を掛けた訳だ」

「心配……してくれてたんだ」

「まあ……な。言っておくけど、下心はないからな。ただ純粹に、一人の人間としてであり同じクラスの生徒として、お前を心配しただけだ……マジだからな？」

「……ありがとう隼人君、何だか嬉しいな」

……予想外。他人を寄せ付けられないような威圧感を放っているが、実際話し掛けてみれば可愛らしい反応を返してくれる。

これがコイツ——桐島 悠と言う人間なんだろう。実際に喋ってみて、何となくだが分かった。コイツは、素はとても優しいヤツなんだ、と。明確な理由、なんてものはない。ただなんとなく、俺がそう思ったからそうだ——それだけの理由だ。

それから、昼休みが終わるまでの間麻宮と話をして過ごした。話せば話すほど、桐島は色んなことを喋ってくれる。家の事や、趣味のこと、ここ最近身近に起きた出来事など。世間話を二人して話していた。

包帯や怪我の件については、聞くのを止めておいた。折角、こうして桐島と喋れているのにわざわざ掘り返す必要もない。如何なる理由があつたとしても、喋りたくないのならそれでいい。

実際の桐島がどんなヤツなのかも、話すことで少しは知ることが出来た。今日はそれだけでもい充分だ。

「つと、そろそろ終わりそうだな」

ふと視線を落とした腕時計。後五分で昼休みが終わろうとしている。

「そうだね。それじゃあ、そろそろ戻ろっか」

そうだな、と答えベンチから腰を上げる。
不意に、桐島が声を掛けてくる。

「ねえ、隼人君」

「ん？」

「どうして私がこんなに怪我をしてるか……教えて欲しい？」

「いや、別に。他人の怪我についてそこまで知りたいとは思わないし」

「そつ、ならいいや」

そう言った桐島の表情は、先程よりも明るくなっている気がした。そして、二人揃って教室に帰り——男子生徒達からと楓による質問攻めを受けることになった。ユンファは……昼食で胃が満たされたのか、気持ち良さそうに眠りながら後半の授業を受けていた。

ユンファと肩を並べて帰宅する。

ユンファは学校が終わってから、ご機嫌な様子でいた。余程楽しかったのだろう。

勉強の方も、特に問題はなさそうだった。日本語は相変わらずだが、全く答えられないと言う訳ではない。言い方は悪いが、頭の方もそう悪くない。

……もしかしたら、俺よりも頭がいいんじゃない、なんて事も思ってしまった。兎に角、これから先特に何の心配もせず、過ごしていけそうである。

「さてと……」

稽古着に着替えて、外に出る。一振りの打刀を携えて。

学校から帰り、夕食を済ませた後の……いつもの日課。五行の構えの一つである中段——『常の構え』を取り、そして目の前に

描いた想像の敵に目掛け静かに、そして鋭く。刀を唐竹に振り下ろす。

風呂に浴びる前には必ず素振りをして一汗を流す。昨日はユンファやキョンシーの件で日課を怠ってしまった。今日は昨日の分も加えて、倍——五百本を振るう。

「ハヤト」

ユンファがやってくる。

学校の制服が余程気に入ったのか、帰ってからもずっと着っぱなしで過ごしている。そして手には、何故かタオルが。

ユンファは縁側に腰を下ろすと、ジッと俺の日課をしている姿を見つめている。その視線を右横から受けながら、続けて刀を振るう。時間が流れていく。静寂が支配する空間にいるのは、俺とユンファだけ。俺もユンファも、何も喋らない。唯一のBGMと言えば、刀が空を奔り鋭く風を切る音だけ。それを耳にしながら、一緒に時間を過ごす。

そして——五百本目の素振りが終わり、構えを解いて一息吐いた。

「ハヤト、はい」

縁側から腰を上げ、歩み寄ってくると手にしていたタオルを手渡ししてきた。

そういうこと、と俺は納得した。

タオルは、俺が鍛錬をして汗を流すだろうと気遣って持ってきたくれたもの。このぐらいの鍛錬で対して汗は掻かないが、折角ユンファは気遣ってタオルを持って来てくれたのだ。それを無碍にすることは、勿論しない。タオルをユンファから受け取り、掻いていない汗を拭いて、ありがとう——と感謝の言葉を述べる。

その言葉にユンファも満足そうに、頷いてくれた。

「ハヤト、頑張ってた」

「ああ、ガキの頃からの日課だよ。爺ちゃんにも、基本と鍛錬だけは怠るなって言われてたからな」

「ハヤトの……爺爺？」
おじいちゃん

「ああ、今はもういないけどな。良いじいちゃんだったよ。親父達が俺が物心付く前に死んじゃって、それから俺をここまで育ててくれたんだ。去年、癌でなくなっちゃったけどな……」

俺には両親がいない。祖父の話によれば、俺がうんとガキの頃に交通事故でなくなったそうだ。そして奇跡的に一人、生き残ったガキの俺は爺ちゃんの家に取り残られる形になった。

俺には絶対にいる筈の親がいなかった。周りの、同年代の奴等には父親も母親もいるのに。俺だけは、そのどちらもないかった……。だからと言って、決して寂しいとか、悲しいとか思ったことは一度もない。

親代わりであり、剣術の師範である祖父がいてくれた。支えてくれる友人達が、大人達がいた。俺は……一人じゃない、それだけは理解している。

「……………」

「……悪い、なんか暗い話になったな。忘れてくれ」

悲しげな顔を浮かべるユンファに、隼人は頭を掻きながら踵を返し家へと戻ろうとする。

――鼓動が大きく跳ね上がった。

大きく跳ね上がった鼓動は、直ぐに元に戻る。だが、全身に流れる血が大きく疼き出す。

一度味わった感覚は、決して忘れられるものではない。

今夜も来たか、と隼人は家へと向けていた足を門へと向ける。

「ユンファ、お前はそこで待ってる」

ただ一言、ユンファに伝える。現状が理解出来ないユンファはキョトン、とした表情を浮かべていた。

そんなユンファに、小さく口元を緩めると隼人は門へと向かって駆け出す。

門へと向かって走る。近づくにつれて、大きくなっていく血のざわめき。間違いない、キョンシー奴等が来た。

「来たかよ……！」

門の前。昨日と同じ様に、キョンシー達がそこに立っていた。数も同じく、五体。

ただ、昨日と違うことはどのキョンシー達も両腕を真つ直ぐに伸ばしていないという事。そして各々、刀剣であったり、槍であったり、武器を手に行っていた。

明らかに、昨日のキョンシーとは違うことが理解出来る。だが、そんな事はどうでもいい。相手が腕を伸ばしていなかつと、武器を持っていようが、俺には何の関係もない。

寧ろ、楽しみが増えたぐらいだ。

キョンシーの姿を見つけると、隼人は不敵な笑みを浮かべて手にしていた刀の切先をキョンシー達に向ける。

「お前等が来たってことは、やっぱり狙いはユンファか？」

キヨンシー達は何も答えない。代わりに、一体のキヨンシーが手にした武器を構えて襲い掛かってきた。

足首のみの動きによる、あの飛び跳ねての移動方法ではなく。生きている人間同等、地を蹴り、駆けながら向かってくる。

一つ、思い出した。キヨンシーは最初は身体の殆どが硬直しあのような動きしか出来ないが、時間が経つにつれて硬直が解けていく。そうなった時、人間同様の動きが出来る。そして――、

手にしていた武器――剣を振り下ろすキヨンシー。袈裟にかけて走る湾曲した青竜刀の刃。それを、手にしていた刀で受け止め鐔迫り合いへと持ち込む。

……キヨンシーは身体の硬直が解ければ、人間と同じ様に活動することが出来る。そして、生前何かしら武術を体得していたのならば。それを通常の様に出せるとも伝えられている。

先のキヨンシーが繰り出してきた袈裟斬り、素人が振る一撃じゃない。だからこのキヨンシーも、門の前で立っているキヨンシーも、何かしら武術を体得しているに違いない。だとしたら、厄介だ。

「ちいっ……！」

刃を押し返し、鐔迫り合いから抜け出す。間髪居れず、相手の首を狙って横に薙ぎ払う。

放った一撃は、確実に。獲物の首を刈り取る。

……それは生きている人間であった場合であり、言い換えれば常識という存在ならではの話。

相手は常識に非ず、非常識だ。故に、大木すらも一刀の元両断しかねない隼人の一撃は、キヨンシーの首で受け止められていた。

こんな理不尽な相手がいるだろうか。正に自然の鎧と言っても過言ではない肉体、如何なる攻撃も通さない身体には、幾ら幼少期より叩き込まれ培ってきた剣と言えど通用しない。

キヨンシーが手にした青竜刀を振るう。後方に飛び退き、それを回避する。

「——ッ」

肩の部分がぱっくりと裂かれる。曝け出された肌からは血が流れ出ていた。

完璧に避ける事が出来なかった。今の一撃は、今まで速いと思っていた祖父の一撃よりも速かった。致命傷にはならなかったものの、一撃を受けたという事実は変わらない。

そんな中、苛烈に攻めてくるキヨンシー。手にした青竜刀の刃が唸りを挙げて、何度も空を奔り襲い掛かるそれを、隼人は刀で防ぐ。見切れない、という事ではない。だが相手の一撃、一撃がとても重く。例えるのなら……巨大なハンマーで殴り付けられているかの様な感覚。受け止める度に刀身が軋みを挙げている音が耳に入ってくる。

今手にしている刀が名刀、とまではいかないが——それでもナマクラとは比べ物にならない一振りではある。その刀が軋むぐらの攻撃を仕掛けてくるキヨンシー。このまま受け止め続けることは……良策じゃない。いずれ耐え切れなくなり折れる。

「チイツ、面倒なヤツだな」

舌打ちをし、相手の斬撃を受け止めて後方へと飛び退き間合いを空けると、隼人は手にした刀を構え直す。その顔に、焦りは無く。喜びを表す、不敵な笑みが浮かべられている。

久々に“本気”を出せる気がする。高揚している時以外に出さな

い……正確に言えば“出せない”のだが。それでも、コイツ等は高揚させてくれるだけの实力がある。

「行くぜ!!」

地を駆け抜け、キョンシーとの間合いを詰める。

突如、月光が遮られる。大きな影が背後から現れ、頭上を飛び越える。

それは身の丈以上の偃月刀を手にし、自分の獲物であったキョンシーへと斬り掛かり斃してしまった、ユンファであった。

「ユンファ……!」

「隼人様、ご無事ですか!？」

先程までのユンファではない。

あの寂しがり屋で何処か甘え体質は一変、凜とした雰囲気、武人としての雰囲気、醸し出す姿。青白い肌に額には一枚の黄色い札。昨晩初めて出会った時の、キョンシーとしてのユンファが目の前に現れた。ただ唯一の違いは、あのチャイナ服ではなくて学校の制服のまま、ということぐらいだろう。

「す、すいません……着替える時間が惜しかったもので、その……このまま」

「い、いや……滅茶苦茶似合ってるからさ、全然可笑しくないって」

本来の姿で制服姿、と言うのもこれはまたアリだった。

あの手の服装ばかりで、スカートそのものを今までに履いた事がないのか。恥じらいを感じながら言うユンファに、不覚にも萌えて

いた。

「……って、また俺の邪魔を！ 邪魔すんなよユンファ、あいつ等の相手は俺だぞ！」

「隼人様はお下がりください。幾ら貴方が剣術が使えたとしても、普通の人間であることには変わりない。貴方にあの怪物を斃すことは不可能です！」

そう言い放つと、手にした偃月刀を構えキョンシー達に向けて地を駆け抜ける。

攻めるユンファを迎え撃つべく、キョンシー達は各々手にした武器を構えて地を蹴った。

ユンファ一人に対し、相手は四人。一対四という状態での戦闘、戦力的に見れば明らかにこの戦いはユンファの方が不利となる。邪魔はされたが、加勢には入るべきだ、そう俺は思い刀を構える。

……俺は普通の人間じゃない。俺は、俺の身体には御神の血が流れている。何者にも屈指ず、何者にも恐れを抱かない、立ちほだかる障害は全て——一刀の元に斬り伏せてきた。それが、御神家の血を引く者だ。

相手がキョンシーだから、と言って関係ない。刃が通らない——それも関係ない。通す術なら……幾らでもある。

「ユンファ！ 俺にも相手を残して——」

「もう終わりましたよ、隼人様」

思わず、こけそうになった。

確かに、キョンシーの姿は何処にも見当たらない。言葉通り、全てユンファが斃してしまったようだ。

ユンファが只のキヨンシーとは、最初から思っていない。だが、改めてそれを認識出来た気がする。ユンファは……強い、俺なんかよりもずっと。

相手も、あのキヨンシー達も決して弱かった訳じゃない。短時間と言えども、相手と手合わせているから分かっている。ハッキリと言って、あのキヨンシー達は強い部類に入る。そんな相手を、五人もの数の敵をたった一人で斃してしまったユンファは……もっと強い。

もし、ユンファが女じゃなくて。敵として俺の前に現れていたとしたならば。その時は、きっと……。楽しい時間を過ごせていたに違いない。

「つーかさ、何で俺の邪魔すんだよ。アイツ等は俺の獲物だったんだぞ」

「何を言ってるんですか！？ 人間である貴方では危険すぎます！それに、初めて御逢いした時に言った筈です。私は、貴方の剣となり盾となり御神 隼人として尽くすと……。隼人様は、私の主なんです。ですから……。どうか危険なことだけは——ッ」

突如大気が震えて出し、重圧が全身に押し掛かってくる。

手にした刀を咄嗟に構える。ユンファも偃月刀を手に再び身構えた。

……今までに感じたことがないぐらい、凄まじくドス黒い殺気。それがだんだんとこの家に近付いてくる。それに伴ってユンファの表情も険しくなっていく。呼吸が乱れ、興奮した状態で、門を睨みつけていた。

「探したぞ、我等が傀儡——ユンファ」

この殺気の主が門より姿を現す。
それは人間でも、キョンシーでもない。正真正銘、本物のバケモノだった。

第三話：新！ 学校生活と敵襲（後書き）

第三話でした。次話、あの妖怪が登場します。
すわっ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5316t/>

幽幻恋譚

2011年10月8日11時02分発行